

臨床教育学講座 99 年度授業科目一覧

■臨床教育学研究（皇紀夫・矢野智司・皆藤章）

臨床教育学と臨床教育人間学の基本的文献、古典の文献を精力的に読む。また、博士論文作成に向けての指導を行う。

■臨床教育人間学特論Ⅰ（佐藤学：東京大学教授）

わが国の教育学の基礎概念を次ぎの三つの視座で検討したい。第一は、「近代性（モダニティ）」の検討である。「近代化＝西洋化」は「文化の植民地化」としてきた。「文化の植民地化＝教育」と定位すると、わが国の教育の「近代性」はどのように再定義されるのだろうか。第二の視座は、教育における「公共性」の再定義である。「公教育」「義務教育」「国民教育」はそれぞれ歴史的にも制度的にも異なる概念であるにもかかわらず、わが国において、この三者は混同されてきた。この三者の関わりの中に各国の教育の固有性と多様性が表現されているとするならば、わが国の「公教育」はどう特徴づけられるのだろうか。教育の「公共性」を学校の政治哲学の中心問題として論及したい。第三の視座は、教育的認識論の問題、特に「物語的認識」について考察したい。教育という経験は物語という様式によってその意味と価値を表現している。しかし、物語という様式は、同時に、制度にかわる制度として教育の経験を内側から補足し呪縛する機能を発揮している。このジレンマの様態を示すとともに、構成主義の認識論の限界を超える試みを教育史の資料や実践記録によって検討したい。この作業は、身体性と他者性を喪失した「学び」の理論に対する批判的な検討へと連なるだろう。参考文献：佐藤学『カリキュラムの批評——公共性の再構築へ』 佐藤学『教師というアポリア——反省的实践へ』

■臨床教育学特論Ⅰ（皇紀夫）

教育の意味発見装置としての臨床——講義の主題は、臨床教育学のこれまでの理論研究が目指してきたもので、本年も基本的にはこれを引き継ぐ予定である。昨年は「こころの教育」を批判して、その言説の陳腐さからの「こころ」の救出がいかにして可能かについて主に仏教の語りの仕組を手がかりに考察を進めた。この論点は従って必然的にこころを論じる

教育の言説の病理に至ることとなり、教育を支える「正常言説」の解体に進む訳である。しかし、この論点は、いわゆる近代的教育言説を批判する立場の教育解体論につらなるものではなく、逆にそうした近代化批判の立場をも崩していく力をもっているのではないかと思われる。教育や子どもや人間を語る言説の不思議な働きについて考えてみたい。こうした論点から、臨床教育学の言説が切り開く教育の人間学的な意味地平を展望したい。

■臨床教育学演習（皇紀夫・矢野智司・皆藤章・田中每美：京都大学高等教育教授システム開発センター教授）

教育の現場では、場面ごとに、多様な言葉による巧みなレトリックによって意味づけされている。教育現場とは、いわば言葉が共演乱舞する場所であるといつてよいであろう。そこでは、子どもたちも、模倣や逸脱、誤解や誇張など、複雑な言葉の共演者である。子どもの理解が、言葉や身体を理解と切り放すことができないのはこのためである。これまでも言葉と身体をテーマに演習をしてきたが、今年度は、言葉が出現する場面に焦点をあて、声、挙手、表情、レトリック、会話など広く言語行為の地平にさまざまな角度からアプローチし、子ども・親・教師の表現とコミュニケーションに関する研究にとりくみたい。なお、本演習は論文指導を兼ねる。

■子どもの人間学演習（矢野智司）

私たちは、子どもという人間の在り方を、遊びや学習といった子どものさまざまな生活を通して理解することができる。あるいは、観察したり、実験したり、調査したりすることによって、より正確な子どもの実態を知ることができる。しかし、子どもによって生きられている世界を理解したいと考えると、上に述べたような方法は必ずしも適切なものではない。どうすれば子どもによって生きられている世界を理解することができるのだろうか。その通路の一つは「回想」である。私たちは、もはや子どもではないが、みなかつて子どもであった。子ども時代の生きていた世界のあり方を、雰囲気や息づかいにいたるまで回想することはたやすいことではないが、優れた芸術家たちはさまざまな形で表現してきた。今回は、子どもたちの世界を奇跡的に描き出している映画を題材にして、子ども時代を回想することの意味、そこから理解される子どもの世界の在り方について教育人間学の立場から考察したい。

■学校臨床学演習（皇紀夫・皆藤章）

学校臨床教育学の方法について——教育やカウンセリングあるいは学校や子どもや教師に関する最近の文献を読み討論をし、日本の教育の病理的事象への理解を深めるとともに、病理的事象を意味づけている教育関係者や心理学者などの語りの文脈に注目していきたい。また、学校で現におきている「問題」や相談事例について現場からの話題提供を受けて、学校臨床教育学の可能性について共同調査研究したい。

■臨床教育学課題演習（皇紀夫・皆藤章）

臨床教育学の学的特性の探求——本講では昨年まで臨床教育の「臨床」の意味について主に解釈学の立場から検討を重ね、「問題」事象を語る言説の仕組みについて、昨年度は特にレトリック論を導入して考察を深めてきた。今年度は、基本的には昨年度までの研究テーマを継承しながら、レトリック論の視点を心理学や人類学あるいは哲学的な人間学に広げて、文献や事例という「テキスト」を読解する方法について研究を進めたい。授業は学生の報告と討論の組み合わせで進められるが、年間を通して数冊の内外の研究文献を精読することを目指している。文献の読み方、レポートの仕方なども機会をみて指導したい。

■臨床教育学購読演習（皆藤章）

文献購読（英）——臨床教育学は、人間が築いてきたさまざまな共同体・文化と人間との相互関係をととして、人間の変容にコミットするという実践的視座をもっている。すなわち、相互関係という水平軸視角と個人の変容という垂直軸的視角の連関が世界にコミットするのである。この授業では、臨床教育学のこのような姿勢の理解に必要な諸テーマについて文献を購読し理解を深める。取り上げるテーマは以下を予定している。

personality, development, initiation, transformation, marriage, integration, the psychological and spiritual growth of the individual, midlife crisis テキスト：“The Development of Personality. (C. G. Jung, CW17)” Sheila Moon, “A Magic Dwells”を基本にしなが、適宜必要なテキストを提示したい。

■教育相談学実習（皇紀夫・皆藤章）

主として学校現場における教育相談の事例についての研究を行う。学校という場所の独自性、教師と児童・生徒という関係の特殊性、家庭や地域との関係の度合い、教師集団の形態の多

様性など、学校での相談活動を取りまく様々な条件を分析しながら、問題事例の意味を語る工夫をする。受講生は月に一度は必ず相談事例あるいは授業事例を報告し、事例の仕方や観察の視点、語の仕組みなどについて共同討論を行う。

■臨床教育学基礎演習（皇紀夫・矢野智司・皆藤章）

子どもの世界——現在の子どもたちはどのような世界に生きているのだろうか。子どもの生きている世界を生きたものとして理解することは簡単なことではない。たとえば、子どもの遊びの世界は、たまごっちやポケモンの流行に見られるように電子メディアによって大きく変容を受けているといわれる。しかし、これを遊びの世界の縮小や墮落と見るのは一面的である。ここには、子どもの驚くべき世界が開かれているはずだ。あるいは、子どもの暴力は近年大きな問題となっている。しかしなぜ暴力は起こるのだろうか。学校が悪いからだろうか。近代教育制度が原因なのだろうか。むしろ、子どもが大人になるというプロセス自体の中に暴力を不可避とする生の秘密があるのではないだろうか。教育の常識を洗い流し、子どもとともに生きるあり方を探っていこう。授業では、子どもについての基本的な文献を読みながら、文献の読み方、発表の仕方、レポートの書き方を学ぶ。

■臨床教育学専門ゼミナール（皇紀夫・矢野智司・皆藤章・田中每美：京都大学高等教育教授システム開発センター教授）

臨床教育学演習を参照。